

江戸時代に於ける

浄土宗の教学制度について

山中 昌弘

問師によつてなされた檀林教学制度が西暦によつて実際に応用され急速に發展を遂げ、徳川時代に於ける本宗檀林教学の組織的發展を為す基礎をつくりあげた、そして江戸時代開幕の始めに於て源誓存応によつて十八檀林の制を定めて学舎を設け勉強に励む宗侶達の為の便を計り、また上下の秩序を規定した。

本宗に於て檀林という名称が使われたのは不明であるが鎌倉時代の末期頃より談所又は談義所というものがあつて学徒を集めて講義をしていた。この談所或は談義所が檀所となり檀林となつたものと思われる。そして諸方の子弟を集めて学事攻究を行なわせる為の寺院の事で、宗侶の学問所に名づけられたものである。これは鎌倉時代以後禪宗を中心として発達流行して來たものが各宗各

派に於ても作られるようになり、本宗に於ても三祖良忠の頃より始まつて來たものである。増上寺才十二世感誓存貞の時に至つてそれを制度化して宗侶養成の学場としたのである、またこの檀林修学の制度化は既に増上寺才十世感誓存貞の時に檀林清規三十二ヶ条が制定せられて宗侶養成に関する規定が設けられていた。

檀林成立の時代的背景は、戦国時代の混乱期を経て全国を統一した家康が、天亀、天正の戦乱に鑑み短を捨てて長を取り、道義を重じ清節を尚び、自から朴素勤勉であつた、そして学問の奨励に務められた、家康は各宗大寺院に対して宗法度、寺院法度なるものを制定するように命令した。寺院法度の制定は社会の秩序整頓の爲であつて、関ヶ原役後一年、慶長六年に於て既に寺院法度の制定を出したのであつて、それは真言宗高野山に於て行つた、浄土宗に於ても元和元年七月七日に浄土宗法度ともいわれるべき元和条目三十五ヶ条が制定せられ、それによつて檀林教学の制度は一層整備される事となつた、関東に十八檀林に於て一定の年月の間修学研鎖しなければ

ば一宗の教師資格を得られないと規定した。

このように学林を中心とした教学制度は、単に本宗のみのものではなく、仏教界全体に於ても、この時期において各宗の学林制度が完備した、この時代の教学の中心は各宗共に学林教学であつて各僧学者が経章、宗典を講義して門弟の育成につとめた。

かかる制度は幕府の政策によるものであるが、地方僧侶の生活が安定し専心学究に心を向ける事が出来たからでもある、また幕府も学識のある僧侶を尊重し、これら寺院を保護した事によるのである。こうした学徒養成の制度が確立したという事は一面より見ると宗侶の学識向上を計る事でもあつたが、反面宗義の自由なる解釈を許さず、型にはまつた封建的な学風を樹立する事になつた。

さてこの檀林の数を十八ヶ所と定めた理由は、鎮西祖伝八に、

象王誓之員而乃選定十八檀林

といい、浄宗護國篇には

公姓十八公而資治國之法乎十八願王（中略）

必建精舍十八区永為叢林多育英才以為法運無窮之謀也（中略）果於武総野等数州開創淨宗教学者凡十八所今世謂十八檀林者是也此益表示家姓十八公云々

といい、又御遺状宝蔵入百ヶ条の中には、

憶我一代之戰場始終八九十合なるべし出萬死得一生者十八ヶ度、都而厭離穢土欣求淨土の法文を帶て得免故今開關東十八檀林謝之子孫永々可為淨土宗門

とある。このように十八檀林の数に対していろいろに書かれている。また浄全によると、

弥陀王本願の才十八位に相当するを以つて其の十八を取り、又徳川氏の本姓松平の松字を解剖すれば十八公と成るを以つてその十八を取るというにあり云々とある、等によりその理由を知る事が出来る。

關東十八檀林の成立年代については、慶長二年説、慶長七年説、又は元和元年という説があつて確かな年代を知る事は出来ない、しかし始めのうちは単に十八ヶ所の

の学問所を設けただけの事であつて、此の員数が満たされたのは寛永三年の靈巖寺創立以後の事である、実際に檀林の機能が充分に發揮されたのは、寛永三年より貞享二年までの六年間の事であつた。しかるにこれら十八檀林以外に別に私に檀林を建てて学問する事は許されなかつた。即ち元和条目才七条に

非古来之学席者私不可建常法幢事
とあるによつて明記せられている。

この関東十八檀林とは江戸時代に於ける本宗々侶養成の機関であつて、一宗教師たらんとする者は、これら十八檀林のいずれかに籍を置いて宗餘乗を学習し、十五年の後兩脈を伝承し二十年にして聖書を受け修学二十年を滿ぜし者は正上人、十五年以上二十年未滿の者は權上人の綸旨を拜す、この事は浄土宗法度に、

浄土修学不至十五年、不可有血脉伝授、殊
更於聖書許可者雖為器量之仁不滿二十年者
不可伝授事

同じく浄土宗法度の中に

(前略) 於令満足二十年之稽古有可令頂戴正上人之綸旨、不二十年者可為權上人事、付十五年以前出世之座次可有正權之差別事、

とある。これを各宗の法度と比べてみると、
曹洞宗法度によると、

不在三拾年之修行成就之僧不可立法幢事
また

不遂二十年修行者不可致江湖頭事
とある。また永平寺捨持寺法度によると、

遂二十年之修行致江湖頭經五年僧云々
また、

非三十年行了者不可立法幢事

とある、このように大体学林に入つてからの修行年数は二十年乃至三十年という一般例があつたため、本宗に於てもこれにもとづいて檀林修学の年次を定めたものと思われる。のち時代の推移と共にその修学年限は多少短縮せられた事もあつた様である。

次に入寺について述るに、入寺とは子弟が寺院に入つ

て住職について出家得度し日常勤行を習修し、ある年令に達した時に關東十八檀林のいづれかに入籍していわゆる宗門の人となるこれを入寺というのである。

寛永九年九月廿九日増上寺照誓了学の時に出された所化掟によると

十五才以前之者無用之事

様子見惡かたわもの

他宗他門諸勤進之類縦_レ漏依_レたるといふ共無用の事
右の条々相背於_レ為_レ入寺者寮坊主共急度可_レ令_レ追放
者也仍如件

右のように、ただ本宗寺院の子弟である者は全てこれ入寺する事が出来るかというところでもない。

すなわち寛文十一年正月十二日に出された檀林能化の会合に於て議決せられたところの定書の才十項に

初入寺之僧十五才以前不可_レ有_レ許容事

また、

一向宗強可_レ有_レ吟味事付件之者於_レ宗門中偽号
弟子所化出候者露顯次才急度法度可_レ申付事

とある。入寺の年令を十五才に定められた理由については明らかでないが、元祖法然上人が出家された年令が十五才であり、また行基僧正、慈覺大師等数々の学匠が十五才で出家されている。依つて出家得度するのは大体古来より十五才頃となつて居り、これが律制によつたものであるから檀林もこの年次をもつて檀林入寺年令を十五才と定めたのであろう。

徳川幕府は學問を奨励し各宗各派にいろいろの法度を作らせた、また幕府の政策によつて寺院の經濟的基礎が確立された、これによつて仏教各宗は教學面に力をつくす宗策を取る事になつた。本宗に於ても宗義攻究の黄金時代を築く事になつたのである。そして他宗派と同様、宗侶育成の爲の教學は大いに發達し名僧、学匠が数多く輩出されたのである。そしてその研究はいわゆる鎮西上人の時代の如き單なる祖述と顯彰にとどまらず、広く宗乗余乗の研究も行なわれて來たのである。

同師の頃までは浄土宗は俱舍、成実宗と同様寓宗的存在であつて獨立教団として大きな發達もせず教學の面に

於ても、既成仏教に対抗出来るまでのものは無かつた。

しかし近世時に江戸時代に入つて一独立宗派として教學の面に於ても檀林制度が確立して、本宗の教師資格を得んとする者には、全て皆この檀林の何れかに入つて宗義を研究する事が必修の學問となつて來たのである。またそれより進んで一般仏教々々であるところの餘乗の研究も行なわれるようになって來たのである。宗乗、餘乗の研究は關東十八檀林を中心に次々に發達し、慶長の頃には総譽清嚴の門下である不殘と、小石川の廓山が南都へ遊學して唯識を研究してこれを檀林に於て講義したのをはじめ、性相學の研究を行なう者も数多く出て來た。

また宗學、史學、仏教學の研究は大いに發達した。しかし元來關東十八檀林は同師の説く宗乗を主に研究する所であつた為、餘乗の如き専門的研究は特に名越派のよきな野の教學に於て發達したのである。依つて増上寺檀林に於ては在野の性相學の學者を招いて講師として學徒の研究にあたられたといわれている。中でも名越檀林の系統からは名匠碩學の者が輩出し、その威力は絶大な

るものであつた。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。